

## 見えるようにしてください

(ヨハネ5・41〜47)

## 一、キリストを信じない人

43節をご覧ください。へわたしは、わたしの父の名によって来たのに、あなたがたはわたしを受け入れません。もしほかの人がその人自身の名で来れば、あなたがたはその人を受け入れます。とあります。律法——私たちの用語で言う「旧約聖書」——に詳しいパリサイ人たちが、神の子として遣わされた主イエス・キリストを目の当たりにして、何も感じられなかったのはなぜなのでしょう。何も感じないどころか、敵対視し、殺そうと思うまでになり、群衆を扇動して、ローマから遣わされていた総督ピラトに迫り、十字架刑にしてしまいました。これは考えてみれば、シヨックなことです。聖書を知りつつも、神と、神がなさることを退けてしまったのですから。

ある時、思いました。自分は主イエスの時代に、パリサイ派のユダヤ人として生まれなくて良かったなあと。もしも、私とその時代にパリサイ人として生まれていたら、自分と神を等しく語るイエスを拒絶していたのではなかったかと。ですが、さらに考えました。自分はほんとうに、神の子イエス・キリストを退けたらどうかと。このことにつ

いては、もう少し真剣に考える必要があると思われる。

## 二、イエスを拒絶した理由

パリサイ人たちの多くが主イエスを拒絶した理由は、何だったのでしょうか。44節をご覧ください。互いの間では栄誉を受けても、唯一の神からの栄誉を求めないあなたがたが、どうして信じることができるでしょうか。と、主はおっしゃいました。この聖句に、主イエス・キリストを信じられない、あるいは信じない、時代と文化を超えた理由があるようです。それは、何でしょうか。

〈栄誉(ドクサ)へのこだわりです。口語訳と新共同訳は「誉れ」、聖書協会共同訳は「栄光」と訳出しています。このことばは、旧約聖書の「神の栄光」「尊厳」「輝き」の訳語として使われたことばです。したがって、単なる名誉よりもワンランク上の「栄誉」「誉れ」「栄光」です。人がこれを求めるとは、どういふことなのでしょう。すでにお気づきになられたかも知れませんが、最初の人間アダムが選んだ罪の道です。自分が神のようになりたいという思いです。創世記3章の、蛇が女に語ったことばに表れています。人(アダム)と女は、神のようになる選択をしました。そして神のようになりました。もちろん気位まへくらひだけですが。罪とは何なのか。悪いことをすることでしょうか。そうでは

なく、罪は、聖なる神から離れている状態です。したがいまして罪人は、神から離れて、正しく立派に生きることもできません。それがパリサイ人の本性ほんしやうです。こうして罪のない、すなわち神と等しい姿を現しておられる主イエスを拒絶したわけです。そういうわけで、イエス時代のパリサイ人が現代に生きても、やはり主イエス・キリストを受け入れることはないでありましょう。なぜなら、自分が神のようになりたいと思っているからです。逆に、今現在主イエス・キリストを信じている方が主イエスの時代に生まれたら、全員ではないにしろ、多くの方が主イエスに心を開くことでありましょう。

## 三、人からの栄誉を求めない

注意すべきことは、人からの栄誉を求めないことです。人からの栄誉を求めますと、パリサイ人のようになります。そして神が見えなくなってしまう。キリストが見えなくなってしまう。恐ろしいことです。さらに恐いのは、神が見えなくても、何とも思わなくなってしまうことです。これは、未信者に対することばではなく、私たちに對することばです。特に、自分は平均的な人よりも賢いと思っている人は要注意です。いつの間にか、すなわち自分が気づかないうちに天狗になってしまい、パリサイ人と同じように、神が主イ

エスを通して語っておられるのに、それが分からなくなってしまうからです。それは、それは恐ろしいことです。へブル書10章31節に「生ける神の手に陥ることは恐ろしいことです。」とあります。では、神が人となられた主イエス・キリストは、地上におられた時、どのような姿だったのでしょうか。41節です。へわたしは人からの栄誉は受けません。と、おっしゃいました。主イエス・キリストは神の子、救い主であり、私共が見倣うべき模範です。信仰の創始者であり、完成者であられる主イエス・キリストは、人からの栄誉を受けない方でした。罪人からの栄誉は、すなわち神から離れている人々からの称賛は、百害あって一利ないからです。だから主イエスは、ご自身を罪人の称賛にゆだねられませんでした。

最後にもう一つのことを、主にあってお勧めいたします。きょう開いたテキストには書かれていないのですが、聖書には添っていると思われることです。それは、私共は人からの栄誉は求めませんし、求めてはなりません。人に對してはエールを送り、ほめることが必要です。人をほめて、その人が高慢になるなどということは少ないですから、今までは今までのこととして、きょうからもっとほめてください。そのことを、主イエス・キリストにあってお勧めします。